植松聖が死刑判決2日後に私に語ったこと

相模原45人殺傷

事件当時の「やまゆり園」

《計画的かつ強烈な殺意に貫かれた犯行であり、悪質性も甚だしい》（判決文）

二〇一六年、相模原市の知的障害者施設「津久井やまゆり園」において、入所者十九人を殺害、二十六人に重軽傷を負わせた元施設職員の植松聖被告（30）に対し、横浜地裁は三月十六日、死刑を言い渡した。

私が、勾留先の横浜拘置支所で植松と面会したのはその翌々日のことだった。

面会時間はいつもと同じ三十分。係官と面会室に現れた植松は、顔を合わせるなり、「これまで本当にお世話になりました」と最後のお別れのような口調で深く頭を下げた。私は出鼻をくじかれた気分だったが、まずは単刀直入に「死刑判決をどう受け止めましたか？」と尋ねた。

「まあ、出るだろうなとは思ってましたけど、納得しているわけではない」

「納得できない点とは？」

「懲役二十年くらいが妥当だろうと」

「それなら控訴すればいいじゃないですか」

私がいうと、「それは、自分がいってきたことと矛盾するので」といった。

「いってきたこととは？」

「二審三審と続けるのはおかしい」

「税金のムダ遣いだと？」

「はい。それに、もう答えは出ているので。ダラダラは出ているので。ダラダラ

本人のフェイスブックより

筆者に届いた手紙

誰もが極刑を疑わなかった相模原19人殺害犯、植松聖の一審判決。だが2カ月間の公判は全容解明に遠く及ばなかった。かねてから「控訴はしない」と口にしていた植松。だが、判決2日後に筆者と面会した彼は、「（死刑に）納得したわけではない」と逡巡を見せたのだ。

ノンフィクションライター
渡辺一史

わたなべかずふみ　1968年生まれ。北海道札幌市在住。20年近く障害・福祉分野の取材を続けている。「こんな夜更けにバナナかよ」で大宅壮一ノンフィクション賞を受賞。「なぜ人と人は支え合うのか」などの著書がある

続けるのは潔くない」

この日の植松は、どこか吹っ切れたような清々しい表情をしていた。すでに死を受け入れ、達観したかのような雰囲気さえあった。

「その後、小指の具合はどうですか？」と尋ねると、植松はキャップ状になった包帯をポンとはずして、右手の小指を見せてくれた。

「やめなさい！」と係官があわてて制止したが、第二関節から上がなく、赤黒いかさぶたが覆っていた。

「言葉だけの謝罪では伝わらないと思ったから」

初公判（一月八日）で植松が小指を噛んで、係官に取り押さえられたことは大きく報じられたが、驚くべきことに、翌朝拘置所で再び小指を噛み切ったのだ。

まるでヤクザのケジメだが、「許してもらうつもりはない。恨まれるのは仕方ないから」と植松はいった。

「裁判では自分の主張を十分に語れましたか？」

私が尋ねると、植松は意外なことをいった。

「はい。心証を良くしようとしてくださったんで」

「心証を？　それは弁護人が？　検察官が？」

「いや、記者の方たちが、皆さんわかってくださっているなと」

私はあわてた口調で、「わかってくださったとは、『意思疎通のとれない障害者は安楽死させるべきだ』という植松さんの主張を？」

「いや、同意はしないまでも、『わかるよ』と。皆さん、思ってくださってるので」

いや、それはないよと私はいいかけて、「私も含めて、みんな植松さんに対して、かなり厳しい書き方をしていると思うけど」

「それはそういうものだから。上からいわれるのかもしれないし」

「はあ」

さらに植松は、判決前に二人の裁判員が辞任したことに触れて、「裁判員の方たちも、わかってくださったんだなと。死刑にするほどの罪ではないと」

開いた口がふさがらなかった。二人の裁判員がなぜ辞任したのかは発表されていない。植松の超ポジティブな姿勢に、はっきりクギを刺すべきなのかどうかとまどった。

植松は、第十六回公判（二月十九日）の最終意見陳述において、こう宣言した。

「私はどんな判決でも控訴いたしません」

控訴期間は、判決の翌日から十四日以内と刑事訴訟法で定められており、期限は三月三十日となる。もしそこで死刑が確定すると、それ以降は家族など限られた人以外との面会や、手紙のやりとりもできなくなり、植松は社会とのつながりをほぼ失うことになる。

果たして彼は宣言どおり、この事件の審理に幕を下ろすつもりなのか――。

「真実」が描かれたカードゲーム

この裁判には、もともと奇妙なねじれが存在していた。それは「重度障害者は安楽死させるべきだ」という主張から事件を起こした植松こそが、じつは「大麻など薬物乱用による精神障害で、犯行時は心神喪失の状態にあった」として弁護側が無罪を主張する方針をとったことによる。

これに対して植松は、第八回公判（一月二十四日）の被告人質問において、「自分には責任能力があります」と明言し、被告自らが弁護方針を完全否定するという注目の展開となった。しかし、話はそこで終わらなかったのである。その後続いた被告人質問で、植松の珍妙な世界観が全面展開することになったからだ。

私はこれまで植松と拘置所で十四回の面会を重ねてきたが、面と向かって話をする限りにおいて、植松に病的な印象はない。

しかし、彼の思考の内部に一歩踏み込むと、その荒唐無稽な世界観には正気と狂気が入り交じった印象を受けるのだ。例えば、被告人質問で植松は、「より多くの人が幸せになるための七つの秩序」と称して、《安楽死、大麻、カジノ、軍隊、セックス、美容、環境》の七項目について持論を延々と説き始めた。

《軍隊》について紹介すると、日本にも韓国のように徴兵制を導入すべきだと植松は主張し、弁護人からその理由を尋ねられると、「韓国の俳優はすごく気合いが入ってかっこいい。日本にひきこもりが多いのは、厳しい試練を乗り越えられないからだと思います」と声を高らかに語った。

また、《美容》について植松は、「美は善良を生み出す」との理由から、「国が整形手術の費用を一部負担すべきだ」という訳のわからない主張を展開した。

あるいは、インターネットを検索して知った「イルミナティカード」というアメリカのカードゲームに「社会の真実が描かれている」と大まじめに語り、近い将来、「首都直下地震で日本は滅び、横浜には原子爆弾が落ちる」という。

弁護人が「それもイルミナティカードに描かれているのですか？」と尋ねると、「いえ、それは『闇金ウシジマくん』というマンガに描かれています」という。

そんな珍問答の続出に、

男女問わず友人が多い

私だけでなく傍聴人の多くが「気は確かか？」と首をかしげることとなった。

弁護側のねらいは明らかだった。植松の荒唐無稽ぶりをあらわにし、逆に責任能力のなさを印象づけようとしていた。

植松の世界観は、インターネットやテレビ、マンガ、ゲーム、そして「自己責任」や「生産性」に代表されるような〝ネトウヨ的言説〟などで形作られている。世の中に流布する断片情報を寄せ集め、世界を理解した気になっている。それもまた、今の社会を映し出す鏡には違いないのだが。

それに対して検察側は、植松の考えは「正常心理の範囲内であり、病的な妄想ではなく、単なる特異な考え方」とし、完全責任能力があると主張した。

植松は奇妙な持論を展開する一方で、弁護人が「事件を起こせばどうなると思いましたか？」と尋ねたのに対し、「捕まると思いました」「厳しい刑事罰を受けてもやるべきだと思いました」と答えている。自らを客観的に認識し、善悪の判断に基づいて行動をコントロールできる、すなわち「心神喪失」ではないことが随所で明らかとなった。

とりわけ第二回公判（一月十日）の検察側の書証調べにおいて、犯行時の植松がきわめて冷酷非道ながらも、沈着冷静に行動した様子が浮き彫りとなった。

深夜、やまゆり園に侵入した植松は、職員を結束バンドで拘束した上で、入所者が「しゃべれるか、しゃべれないか」を職員を連れ回しながら確認した。

植松の意図に気づいた職員が、「しゃべれます。みんなしゃべれます！」と泣き叫ぶのに対し、「お前めんどくさい！　こいつしゃべれないじゃん」といって入所者に刃物を振り下ろしていった。また、職員の口をガムテープでふさぐ際に「苦しくなったら鼻で息を吸え」とアドバイスするなど、目的を果たすために理に適った行動を選択する植松の態度に、責任能力を疑う人はいなかっただろう。

交際相手が語った「両親との関係」

裁判全体を通して、植松には果たして責任能力があるのかないのか、聞く者の印象が二転三転するスリリングな展開となった。

そんな中、事実が解明されたことで、逆に謎が深まった問題もある。

例えば、第六回公判（一月二十日）以降、植松の幼なじみや学校時代の友人らの供述調書が、弁護人によって読み上げられていったが、植松がじつに多くの友人に恵まれていたことだ。

「サト君（植松）には大学の学部関係なく、たくさんの男女の友人がいました」

大学時代に所属したフットサルサークルの二学年後輩の女性はこう証言する。

「サト君は明るい性格で、サークル内でも人気者でした。新しく入ってきた後輩が、先輩たちの輪に入れないのを見たりすると、その手を引っ張って輪の中に入れようと努力している姿を見たことがあります」

植松には、昨今の無差別大量殺人の犯人によく見られるような孤立感がまるでない。昨年の京都アニメーション放火殺人事件や、二〇〇八年の秋葉原通り魔事件に代表されるように、まともな職や人間関係に恵まれず、世間から孤立した人間が、いわば社会への復讐を試みるかのように起こした事件とは質的に異なる。

植松は、その対極の「リア充（現実生活が充実した人）」に属するタイプだ。

女性経験も豊富で、中学時代に二人、高校時代にも二人の交際相手がいた。大学以降も交際相手は途切れることがなく、出会い系サイトやナンパなどで不特定多数の女性とも関係を持った。第六回公判では、植松の高校時代の交際相手の供述調書が読み上げられたのだが、私はとりわけ次のような箇所に衝撃を受けた。

《私たちは、土日になると、お互いの実家を行き来していました。植松のお母さんは、「あら、かわいい子ね。サトシよかったじゃない」といって私にもやさしく声をかけてくれました。お父さんは、最初は無口で取っつきにくい印象でしたが、あるときお父さんに声をかけられてリビングに行くと、お昼ごはんにパスタを作ってくれていて、私が「おいしい」というと、「そうか」とお父さんもうれしそうで、徐々に打ち解けていきました。植松は、私とどこにデートに行ったかなど、何でも両親にオープンに話しており、植松の家族はとても仲が良さそうでした》

これまで謎に包まれていた植松の生育歴、とりわけ両親との関係が浮かび上がってきたのも、この裁判の成果の一つだろう。面会時の植松は、親との関係につ

週刊文春 新型コロナウイルス完全防御ガイド 主要書店・コンビニで緊急発売中!!

入れ墨は大学3年生の頃から

高校の卒業アルバムより

いては一切口を閉ざしており、両親には私も取材依頼の手紙を出したものの、いまだどのメディアの取材にも応じていないからだ。

植松は、父親が小学校教師、母親は漫画家という家庭に生まれた一人っ子だが、「父親が教育者で厳格すぎたのではないか」とか「母親が表現活動に熱心で息子への愛情が不足していたのではないか」などさまざまな憶測が流れていた。私もまた、植松が親との関係に何らかの問題を抱えており、それが彼の人間性に影響を与えたのではないかと推測していた一人だが、どうやらそうではなかった。「ごく普通の温かい家庭」に育ったことが、第十二回公判（二月七日）の鑑定医の証言などからも裏づけられることとなった。

一方、今回の裁判でまったく触れられなかった点を挙げると、その一つが、「ネット空間」が植松に与えた影響についてだ。

植松は「イルミナティカード」などに感化され、しだいに世界観そのものを乗っ取られるかのように思考をゆがめていったが、以前取材した大学時代の友人がこんなことをいっていた。

「仲間うちで、イルミナティカードとかはまったく流行ってなかったし、僕らはサトシが動画サイトにのめり込んでいたこともまったく知らなかったです」

植松がヤフーニュースなどのコメント欄に差別的な書き込みをしたり、動画配信サイトに犯行予告めいた動画の投稿を繰り返していたことはよく知られているが、友人はこうもいう。

「鼻先を小突きました」

「サトシがどこで一線越えちゃったのか、仲間うちで話すんですけど、みんなわからないっていうんです。考えられるのはネットの世界で持ち上げられたのが大きかったんじゃないかと」

それまで真面目でおとなしかった人が、ネットの差別的な言説に感化され、急激に意識が変容し、ヘイトスピーチに加わるというような現象が、今日ではごく普通に見られる。精神疾患とまではいえないが、妄想にとらわれ、執拗に弱者に攻撃的である点で植松と共通する。そこには、ネット時代に普遍的な問題が横たわっているように思う。

そして、もう一つ残念なのは、弁護方針が「大麻などによる精神障害」に終始し、やまゆり園の実態解明につながらなかった点だ。

やまゆり園で働き始めた当初の植松は、入所者を「かわいい」と感じていたと、多くの友人たちが供述している。にもかかわらず、何をきっかけに「この人たちは生きている意味がない」と考えるようになったのか。そのプロセスを、園の関係者や利用者家族の証言を交え、もっと明らかにする必要があったはずだ。

例えば、第九回公判（一月二十七日）の被告人質問において、次のような場面があった（以下、検察官は「検」、植松被告は「植」）。

検　やまゆり園の職員の方たちについて、何か思ったり感じたりしたことはありますか？

植　少し感覚がズレてしまうのかなと思いました。

検　どんなふうに？

植　人間として扱えなくなってしまうと思いました。

検　具体的には？

植　口調が命令口調で、（利用者を）人として扱っていないと思いました。

検　職員の方が暴力を振るうことはありましたか？

植　聞いたことはあります。

検　見たのではなく？

植　あーどうだろう……自分は、初めは暴力は良くないと思っていました。

検　「良くない」と職員の方にいったのですか？

植　はい。

検　その職員の反応はどうでしたか？

植　二～三年やればわかるよといわれました。

検　あなたも暴力を振るうようになったのですか？

植　無駄な暴力を振るったことはありません。

検　無駄じゃない暴力というのは？

植　しつけだと思ってやったことはあります。

検　どんなことを？

植　鼻先を小突きました。

検　鼻先を？

植　犬も鼻先を小突いてましたんで。

検　動物のしつけと一緒？

植　はい。

検　そういう経験を通して、意思疎通のとれない障害者はいらないと思った？

植　はい。

こうしたやりとりが行われたにもかかわらず、審理の過程で大きな論点となることはなかった。

死刑判決は当然だと私は思う。しかし同時にこうも思う。「障害者はいらない」と主張して事件を起こした植松に対し、「お前こそいらない」との判決を突きつけるだけで終わるなら、それは本質的な解決といえないのではないかと。